週刊朝日

大正11年2月25日
第三種郵便物認可通巻2662号
（毎週金曜日発行）
昭和45年1月23日発行
昭和24年3月28日
国鉄特別扱承認雑誌第310号

1-23
1970 70円

東レ、早川、東棉が社名変更に賭けたイメージ戦略

「自衛官が反戦でなぜ悪い」—初めて語る 小西 元三曹

「さみしい楽天家」エノケンの泣き笑い人生

日本とアメリカ　この25年　No. 5

南　鳥　島

撮影・秋元出版写真部員
<本文参照>

八丈島

鳥島

小笠原諸島

硫黄島

南鳥島

1968年6月26日　小笠原諸島の返還と同時に日本にかえった太平洋上の孤島・南鳥島　周囲は約6キロ　真珠貝のようなかたちをした美しいサンゴ礁の小島は東京から南東へ1650キロの洋上にうかぶ　住人は気象庁職員17人　海上自衛隊員10人　それに米国沿岸警備隊員33人の計60人だけ　日本では　気象観測の島として有名だが　実は島の中央に410メートルの大アンテナをもち　米軍機や艦船に位置測定のための信号電波を送るロラン局基地があり　米国の西部太平洋戦略のひとつのカナメとして　返還後も引続き使用されている

島は正式には東京都小笠原村南鳥島　ただし　この宛名では郵便は届かない　一般の住民はもちろん　女性もひとりもいない　住人たちの楽しみのひとつは　毎週おこなわれる日米対抗ソフトボール試合　荒っぽいプレーがぶつかり合う

南鳥島は　日本の気象観測の上で　なくてはならない重要地点　台風や梅雨前線の動き　長期予報などを出すために欠かせないデータがここで集められる　観測は高層と地上とに分れるが　高層観測では毎日９時と21時の２回　ラジオゾンデを上げ　上空約26*。までの気象をさぐっている

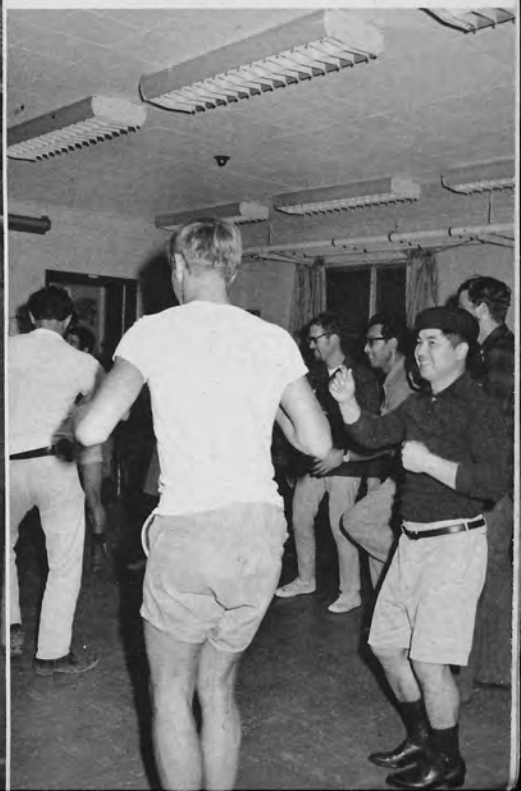
南　鳥　島

この絶海の孤島では　男たちの最高の楽しみはパーティー　何のかの口実を見つけては日米合同でビール・パーティーやバーベキュー・パーティーを開いてワイワイ＝米海軍沿岸警備隊のメスデッキ（食堂）で

カラーグラビアからつづく

これが米軍ロラン基地の心臓部　信号電波を作りだすタイマー・ルームは24時間のフル運転で　いつも当直の隊員が交代で立つ　副隊長のケイソン准尉（右）がテスターを使ったり　配線を見せたり「ここには秘密なんかアリマセン」と大サービス

なにしろ女っ気は皆無　そこで住人はもっぱらエネルギー発散にセイをだす（？）全員が激しく体を動かすゴーゴーに人気が集中するのもムベなるかな　沿岸警備隊のパーソンズ隊長（中央奥）も自己流の踊りでハッスルする



殺菌情報

"お帰りなさい、アポロ12号"

と、月から帰った12号を迎え、殺菌したのがPVPアイオダイン＝イソジン。11号に次ぐイソジンの活躍です。そのウガイ薬がイソジンガーグル。ノドの痛みをとり、風邪を防ぎます。

ウガイ方式の治療薬　イソジンガーグル

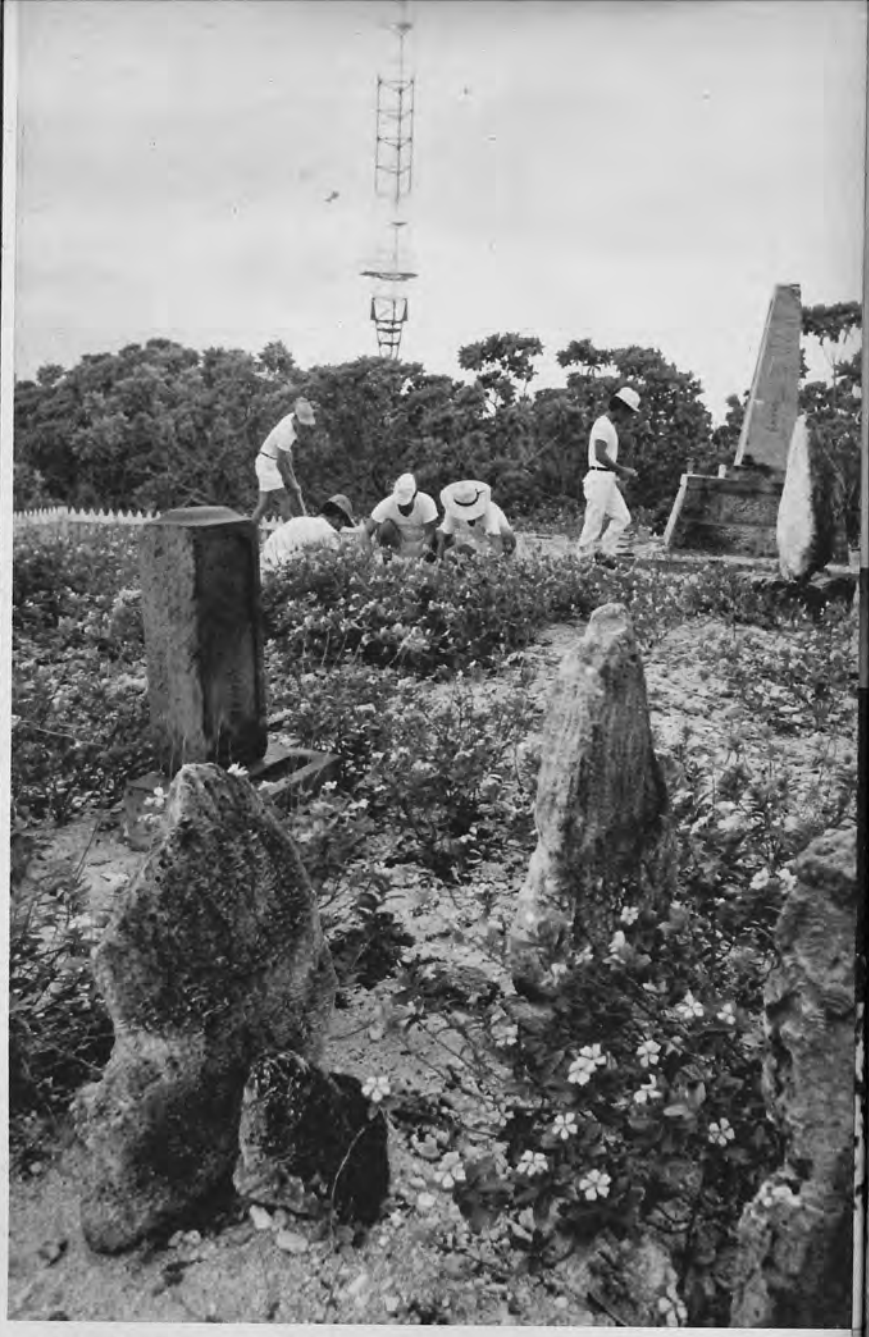
●アポロを殺菌した

イソジン

（PVPアイオダイン）

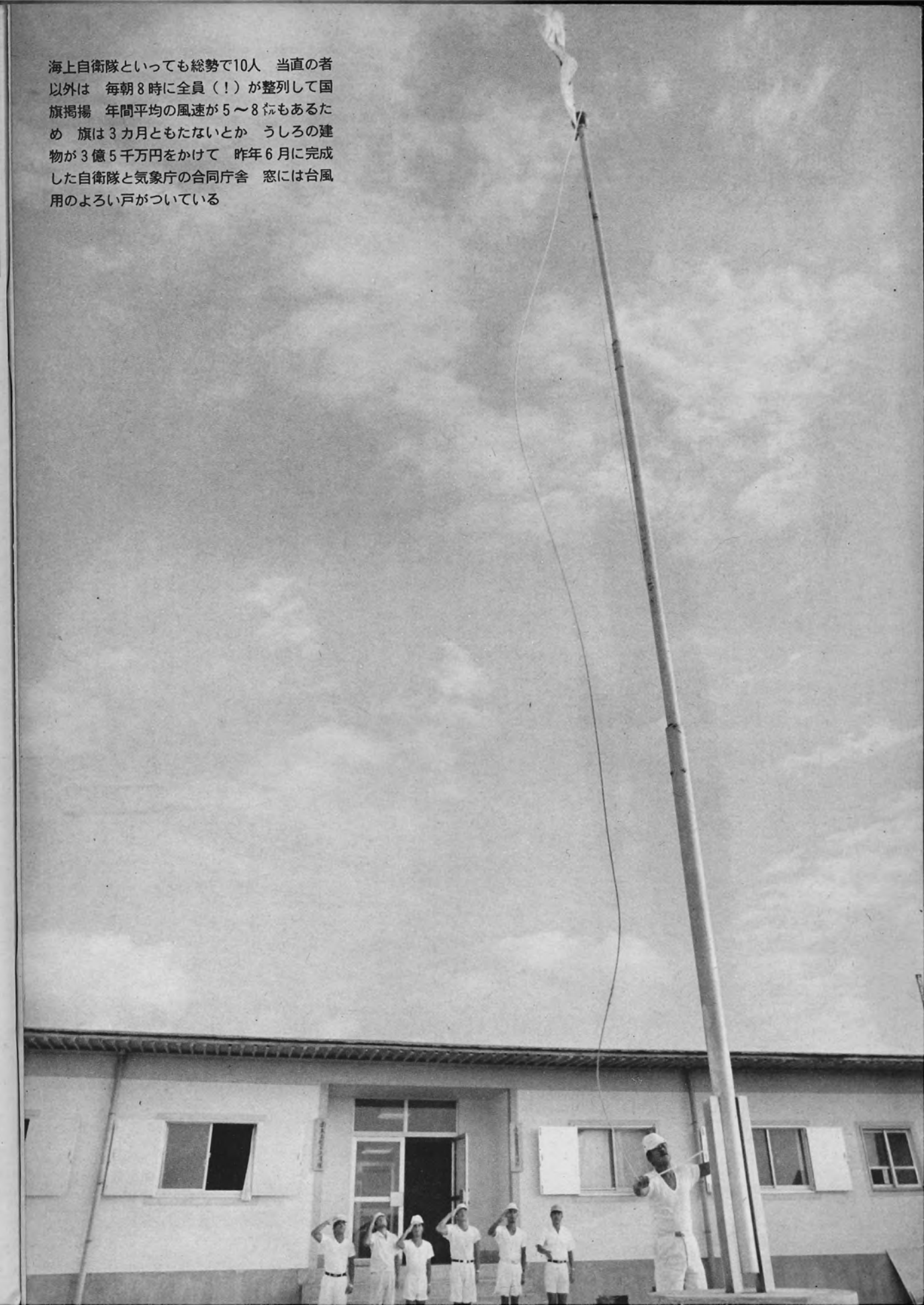
Meiji

明治製菓・薬品部



ロラン送信所の大アンテナの下手前が「日本人開拓者の墓」その向うが「忠魂碑」　サンゴ礁のため黒い土がなく草木が少ないこの島でも　ここだけはモンパの林が周囲を取巻き　墓地にはニチニチソウが可憐な花をつけている　管理は自衛隊員の仕事

「とう とう 台 風 になりやがったか」　熱帯性低気圧が台風に成長して　当直の気象庁観測員はがぜん緊張　気象庁からファックスで送られてきた天気図とにらめっこで「本土への心配はないが　遠洋漁船は大丈夫だろうか……」



海上自衛隊といっても総勢で10人　当直の者以外は　毎朝8時に全員（！）が整列して国旗掲揚　年間平均の風速が5～8㍍もあるため　旗は3カ月ともたないとか　うしろの建物が3億5千万円をかけて　昨年6月に完成した自衛隊と気象庁の合同庁舎　窓には台風用のよろい戸がついている

連載 日本とアメリカ この25年 5

絶海の孤島「南鳥島」の米軍基地

〈グラビア参照〉

南海の孤島・南鳥島が、ここに登場することに、おやと思われる方もあるかもしれない。だが、〝戦後〟は、こんな小さな島にもその影を色こく落している。日本人にとって、気象観測のうえで、なくてはならないこの島は、同時に、米軍の西部太平洋戦略のうえでも、欠くことのできない重要な位置を占めている。

（写真は四百十㍍と東京タワーよりも高い米軍沿岸警備隊ロラン基地のアンテナ。この基地は返還後も引続き使用されている）

そのとき、われわれは思わず歓声をあげた。

われわれ五人を乗せた本社機「東風（こちかぜ）」号は、太平洋戦争末期の激戦の島・硫黄島を飛びたち、東に針路をとってから、すでに四時間あまり飛びつづけていた。高度三千㍍、外は雨。下は一面に白波だち、灰色がかった青緑の大海原である。一隻、米ツブのような、波間に翻弄される漁船を見てから、もう二時間ほど、目にうつるものといえば、ただ海ばかり。「東風」の風防ガラスはずっと、たたきつける雨滴に洗われていた。羽田を飛びたってから、八丈島、硫黄島と飛石づたいに足をのばして、三日目の午後だった。

そこへ、視界のなかに、白っぽい三角形がとびこんできたのである。われわれは窓に頬をはりつけて、流れる雲の下に、待ちかねた島影が迫るのをみつめた。

南鳥島は北緯二四度一七分、東経一五三度五八分。日本の最東端であると同時に、硫黄列島や八重山諸島とともに最南端にある。東京から南東へ千二百八十㌔――東京島から東へ千二百八十㌔、硫黄島から飛ぶと、グアム島やウェーク島からよりも、なお時間がかかる。本社の双発機にゆられながら、改めて、南鳥島が絶海の孤島であることを思い知った。

それも、島の周囲はたったの六㌔。空から見ると大海原に浮ぶ木の葉のようでまことにたよりないが、島全体が白っぽく、海岸線をサンゴ礁特有のリーフが縁どって美しい。だから、アメリカ人からはパール・アイランドという愛称でも呼ばれている。

人口六十人の小島

島へ近づいたとき、まっ先に気がついたのは、とてつもなく高いアンテナだ。東京タワーをはるかにしのぐ、四百十㍍の高さで、島の上空を旋回中にひょいと手をのばしてつかめば、島全体がスポッと海から抜けてきそうな錯覚を覚えた。これが、米海軍コースト・

ガード（海軍沿岸警備隊）のロラン局基地のアンテナだった。滑走路では半ソデのアンダーシャツに白い半ズボン姿で、数人の海上自衛隊員が誘導してくれた。

東京都小笠原村南鳥島。前にものべたように、小さな小さな島だから、総人口はたったの六十人。それもムクツケキ（？）男ばかりだ。内訳は、主力が米軍コースト・ガードの三十三人。ロラン基地の兵隊である。残りが日本人で、気象庁職員が十七人、海上自衛隊員が十人。自衛隊は、飛行場、道路などの維持管理を受持っている。

この島は、一九六八年六月二十六日、小笠原諸島や硫黄列島とともに、米国から日本に返還された。それいらい、いまのような"日米関係"が続いているのである。

日本側は、自衛隊と気象庁の合同庁舎に住んでいる。玄関と食堂と風呂場が共同で、右手に気象庁、左手に自衛隊が入っている。強風を避けるために平家建で、高潮から守るために、島でもいちばん高い土地に盛り土までして建てられたが、それでも床面で、やっと海抜八・三㍍という。

建って半年にしかならないのに、近寄ってみたら、窓にとりつけた台風用のシャッターに、掘りこぶしよりも大きな穴があいていた。昨年十月四日に、台風十四号がこの島を直撃した。そのときの風は五十㍍を越え、風速計の針を振りきらせたほどで、石までが吹飛ばされたのだという。そういえば、ほかの建物も、屋根が吹飛ばされたり、雨どいがたれ下がったりで、台風のすさまじさをいまだに、まざまざと伝えている。

絶海の孤島をおそうのは台風だけではない。この十二月の半ばに着任したばかりの観測所長の小谷野正喜さんは、風邪のセキをこらえながら、こういった。

「水と個人的な通信と病気が、不安です。水は空だのみ、通信は自衛隊さんだのみ、病気は……もし急病人が出て、天候状態が悪くて飛行機が飛べなかったら、と思うとゾッとします。

わたしたちが乗って来た気象庁の凌風丸で、風邪の菌も運ばれてきたらしいんですが、気候がいいもんだから病菌が元気よいらしく、ごらんのように風邪がなおらなくて……」

ケッコウ楽しい"超僻地"の生活

東京のなかの"超僻地"。そして、女人島ならぬ男人島だ。任期が六カ月とはいえ、二十歳代の自衛隊員にとってこれはこたえる。

「休暇で本土に行くと駅のベンチなんかにボサッとすわって一時間も女のコたちをながめてるんだ」

「そして、バーかなんかに入って話相手になってもらって、ガバーッと巻上げられちまうんだあ」

こんな話が、のっけから耳に入った。週一回のヨコタからの米軍定期便が来ると、スチュワーデス嬢の姿をおがみに、ワッと滑走路へくり出すのだそうだ。

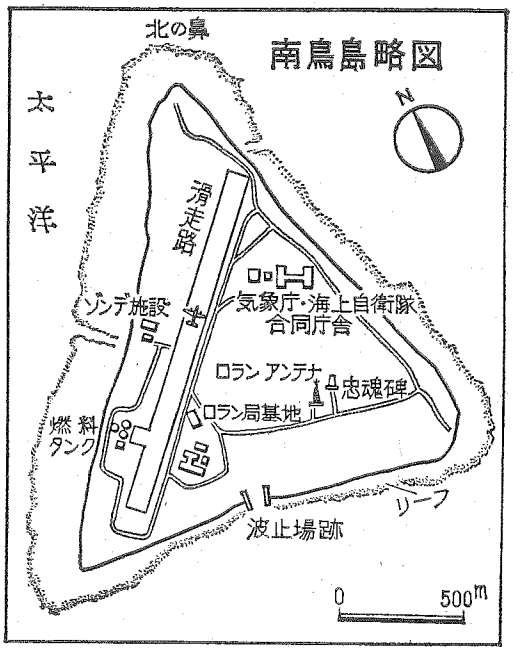
ただ、そうはいっても、ここなりの楽しみもまた、すてがたいらしい。気象庁の観測員も自衛隊員も異口同音に、「ケッコウ楽しいんですよ」といった。年平均気温が二十五度。暑いといっても庁舎のなかは冷房がゆき届いている。一年を通して、半ズボンに半ソデのシャツ姿で過ごせる。交通事故などは、それこそ、自分で運転して海にでもとびこまなければ、起りそうもないし、通勤の疲れもない。仕事のヒマには、ゆうゆうと南海の釣りを満喫もできれば、大きなエビを手づかみにすることもできる。米海軍コースト・ガード隊員とのソフトボールの交歓試合やパーティー、ささやかな賞品を競うビンゴ・ゲームなども、なかなかのものらしい。

テレビはなく、新聞も自衛隊の定期便が十日に一回運んでくるだけなのだが、これが逆に開放感（？）を与えてもいるらしい。三カ月という任期をわざわざ自分から延長して、すでに一年近く島にいるという気象庁の二瓶さんによると、

「さびしくなんかないね。情報があふれている本土の感覚で考えたら、さびしいと思うかもしらんが、もともと本当に意味がある情報は少ないんだものな。月に二冊も雑誌を送ってもらえば、ケッコウ時代遅れにもならんでいけますよ」

そして、多くの人びとも、この点では似たような感想をもっているようだ。

女のコも訪問客もなく、それに第一、床屋がいないから、無精ヒゲになるのも当然だが、そんな長髪にアゴヒゲ姿の男たちにとり巻かれて話を聞いていると、なにやらヒッピーの楽園にでもやってきたような気分になってきた。変り



補聴器は専門店へ
米国製 メガネ式
独乙製 耳掛式
日本製 耳穴式
コード式
▶呈カタログ◀
（純正部品によるアフターサービス、完備）
創業56年 補聴器専門店 吉田勝恵商店
東京店 東京都中央区日本橋堀留2の8 TEL 03(661)4370
大阪店 大阪市西区靱本町2－7 TEL 06(441)3023
岡山店 岡山市鹿田町1－6－13 TEL0862(22)9208
小倉店 北九州市小倉区京町11の331 TEL 093(55)1552

者の世界といいたいところだが、都会から脱出してきて一緒に暮してみると、「ケッコウ楽しい」わけも、わかるような気分になる。

ビールやウイスキーも、ほぼ欲しいだけ手に入る。いまや落ち目の世の男性たる者、こんな生活のなかで、自分を考えてみるのもいいかもしれない。

こんなふうに見てくると、いとも平和な島なのだが、さて、男たちの任務に立ちかえると（米国人も含めて）、いささか、〝夢〟はさめる思い。彼らは気象観測員と兵隊である。そして、この両者は、一九三三年に民間人が南鳥島を放棄してから今日まで、一貫して島の歴史を作ってきたのであった。

ふりだしは、一九三五年。帝国海軍が気象観測を始めた。そして翌年、早くもこの島が、風雲急を告げる太平洋上の軍略の拠点としてクローズアップされた。囚人を使って軍用飛行場が建設されたのを皮切りに、島は要塞化への一途をたどる。敗戦時には四千五百人の将兵と戦車十二台があったといい、いまでも、トーチカのあとや、骸骨のような戦車が残っている。しかし、米軍は上陸せず、被害は空襲で七十一人の死者が出たにとどまった。

四五年九月に米軍が進駐、マーカス島と改称された。機械化部隊が上陸したらしい。四七年、台風による高潮をかぶって全員が引揚げて、しばらく無人島時代がくる。当時の米国西部太平洋戦略にとっては、この絶海の孤島は、あえて駐留するほどの価値がなかったのか。

それから数年後、日本側の要望もあり、占領国と被占領国の間に、ひとつの契約がかわされた。それが占領軍の提案による、他にあまり例のない〝契約観測〟の開始で、一九五一年四月から六三年六月三十日まで、十二年あまりにわたって、気象庁の手で気象観測が続けられた。

その間、五二年四月の平和条約発効で、南鳥島は沖縄と同じく、米国施政権下に入っていた。

「全面返還」のはずだったが……

六〇年代に入って、エレクトロニクスや原子力潜水艦、誘導ミサイルの発達などにともなう戦略の転換とともに、米軍は南鳥島の地理的重要性を再認識したらしい。気象庁の観測は打切られ、米軍は無線基地を開設した。このとき、これまでの気象庁の施設は、ロラン・アンテナの障害物になるというので、島を覆っていた緑濃い樹林とともに、跡形もなく取払われてしまった。気象観測の仕事はコースト・ガードといっしょにやってきた米商務省気象局員に引継がれ、日本人は島から姿を消した。

それからちょうど五年後の小笠原返還。南鳥島の気象観測は三たび日本人の手にかえった。台風の通路にあたり、梅雨前線の動きや長期予報に欠かせないデータを得られるこの島は、世界気象機関（WMO）の重要観測点に指定されている。だから、この返還は、気象関係者や遠洋で働く漁業関係者にとって大きな喜びだった。

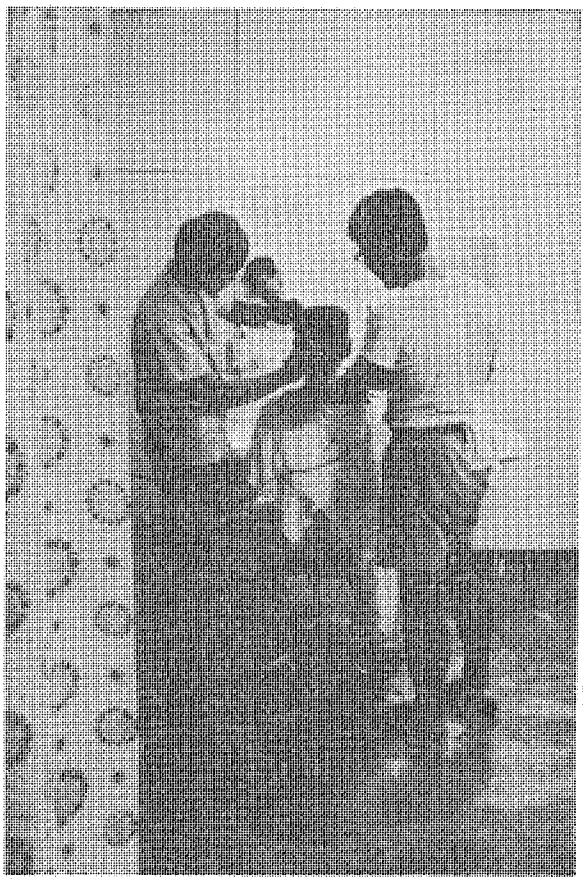
しかし、この時から海上自衛隊も島に同居するようになった。海軍と観測という、この島の〝伝統〟が復活したというべきか。

池田芳三さんは、〝契約観測〟時代の途中から気象庁の観測に加わり、以後、気象庁不在の時以外は毎年、南鳥島勤務についてきたひとだ。その池田さんは、島の変化についてこういう。

「復帰して、五年ぶりに来てみると、パパイアの木がすっかり倒されていたんです。あの実を食べられないのがさびしいですね。ロランのアースをアンテナを中心にして半径五百㍍の地表に、二度おきに放射状に張るっていうんで、島は丸坊主にされたらしい。それでも、頑んでいった忠魂碑や墓はもとのまま保存されてましたが」

「全面返還」をうたわれた小笠原返還だったが、硫黄島と南鳥島にあるロラン局基地は例外だった。

南鳥島の場合は、島のほぼ半分の地域を、この基地が占めている。ロランというのは、航空機や艦船が、陸上の三局以上の無線局から同時に受ける信号の到着時刻の差を測定して、進路を修正しながら航行する航法のことで、南鳥島にあるのは軍用局だ。この小島に不釣合いな大アンテナは、半径二千五百㍍の範囲に信号電波を送ることができる。自衛隊の受信機で日本の短波放送を聞いたら、規則正しく、ピーッ、ピーッと入るロ



島にはもちろん床屋などはない。ときどき洗面所に臨時バーバーが開店するが，長髪にヒゲぼうぼうの，一見ヒッピー風の男たちが目立つ（気象庁宿舎で）

ランの電波の断続音が印象的だった。主局は硫黄島で、北海道の十勝太やヤップ島などとともに南鳥島は従局だが、米軍のロラン網はニューギニアからカムチャツカ半島まで、西部太平洋の空をスッポリと包んでいる。グアム島から北ベトナム爆撃におもむくB52も、沖縄に飛来するB52も、エンタープライズも、そして、いまや戦略の中心的存在の原子力潜水艦も、この電波の援助を受けて活動しているのである。

三十三人のコースト・ガード隊員を指揮するのは二十六歳のパーソンズ中尉。副官で三十六歳のケイソン准尉が、長身をかがめて説明しながら、基地の全施設をニコニコと案内してくれた。

「秘密？　そんなものはないね。ここの電波は、どんな船だって、受信機さえ備えてれば利用できるんだ。この電波がヤップで、これが硫黄島だ。機械についてもっと詳しく説明しようか？」

これには恐れいって、エレクトロニクス専門の彼の説明は辞退することにした。彼らは、一年間という任期で島に来ているのだが、

電子時代の戦争のパイロット

ケイソン准尉は、このロラン局について、民間の船や飛行機の航行にも役立つものだ、といった。しかし、軍事専門家によれば、非常に高価だから、漁船などにはとても装備できないという。そして、戦時になると、軍用機、原子力潜水艦、ABM（弾道弾迎撃ミサイル）にと、フルに力を発揮する。いわば、エレクトロニクス時代の戦争のパイロットがロラン局基地なのだ。

「はじめの半年までは楽しいが、あとは指折り数えて、帰国の日を待ってるんだ」と、居室の壁にはられた家族たちの笑顔の写真に目をやった。その隣には、クリスマスカードがズラリとピンでとめられていた。

こういう現実のなかで、日米三つの〝集団〟は、こともなく、うまくいってるようにみえる。住人六十人の大部分が二十代。うちとけるのに手間はかからない。なんやかんや〝口実〟を見つけてはビール・パーティーやバーベキュー・パーティーを開いて日米交歓といく。日本側がビールを受けもてば、コースト・ガードが食べ物を用意する。本土から、小さな飛行機でやってきた日本人たちのためにもパーティーを開いてくれた。

大声でうたい、ビールを口の端からしたたらせながら、飲み、笑い、踊る。当直以外の住人たちがほとんど集ってくるから、四十人にもなろうか。ゴーゴーの割れるようなリズムに体をくねらせながら、ある米兵がいった。

「おまえの国のカーのように、ちっぽけなやつで飛んできたんだな。まるでカミカゼだよ」

コースト・ガードのメスデッキ（食堂）には、ムンムンするような男の体臭と、得体の知れない熱気があふれる。

どこかの場末のストリップ小屋でしこんできたような腰振りを見せる男、ビールの流れた床をハダシで踊る男、とっておきのストロー・ハットにカクテルを注いで、それを回し飲みさせようとする男……。自分が楽しむために、みんなを引込み、そして疲れ果てるまで、飲み、踊り、笑う。しかし、そんな中でも、気をつけて見ていると、当直の交代で数人が入替りに立っていった。そして数時間。夜が深まるにつれ、ひとり減りふたり消えて、いつしかパーティーはおひらきになった。ケイソン准尉に別れを告げると、すわった目で、「お前はまだここにいる責任があるぞ」と叫んだ。

外気にあたって夜空を仰ぐと、あの巨大なアンテナが、赤いランプをずらりと灯して、強風の中でうなりをあげながら、頭上にのしかかってきた。ここは基地。アンテナの下で、そのアンテナの意味をほとんど忘れて、一見、平和につづく島の生活――ソンミ村の虐殺や総選挙が、ひどく遠く感じられた絶海の孤島の四日間だった。

南鳥島で　本誌・藤沢記者

安心できる交通公社の旅館券

旅館では、つねに大切なお客様として歓迎いたしております

冬の温泉旅行なら――
白い湯煙りのたちこめる窓に、
白い山々。あたたかいお部屋で
冬のひと夜の思い出。
交通公社の旅館券やキップは、
全部そろえて
出発してください。

日本交通公社
協定旅館

信用とサービスの目じるしです

日本交通公社協定旅館連盟

旅館券のお求めは
日本交通公社